

Title	役に立つことと無駄なこと
Author(s)	望月, 隆二
Journal	歯科学報, 111(4): 4i-4i
URL	http://hdl.handle.net/10130/2602
Right	

役に立つことと無駄なこと

望 月 隆 二

新入生に物理の講義をしていると、遠慮のない学生から「歯科医学を学ぶ上で物理は役に立つのか」といった質問を受ける事がある。彼あるいは彼女は「役に立たないよ」という答えを期待し、だから勉強しなくても良いのだ、という免罪符を手に入れたいのかもしれない。あるいはもっと真摯に、より役に立つ勉強に時間を割きたいと考えているのかもしれない。

しかし、「役に立つ」とはどういうことだろう、という疑問は残念ながら学生の意識にはない(ことが多い)。例を挙げるまでもなく、役に立つ知識、あるいは生活していく上で必須の知識は存在する。一方で、今やっている事が自分の役に立つかどうかを判断するのはきわめて難しい。まず、自分の人生の目標や希望を定めなくてはならない。次にそれを達成するための一つずつのステップを設定する必要があるだろう。目標や希望は多数あるだろうから、ステップの数は莫大であり、さらにそれらの大部分は彼(彼女)には未知のものである。この事情は親や教員、あるいは先輩に相談したところで大して変わらない。結局、近い将来に役に立つ知識、役に立つ勉強のいくつかを選び出せるのがせいぜいであり、すべての事物を役に立つものと役に立たないものにと選別する事など出来はしないのである。

しかし、より危惧されるべきは「役に立たない勉強はしない」という姿勢が自らの可能性を狭めかねないという事である。一人の人間の持っている時間に限りがあるのは言うまでもない。だからといって、今の自分から見通せる範囲だけに人生を限定する必要はない。一見全く無駄にしか思えない勉強が、いつか新たな視野を獲得する鍵となるかもしれない。そこまで大げさでなくても、通り過ぎるだけだった景色に別の意味を見出せるかもしれない。

歯科医学を学ぶ上で知らなければならない知識、習得しなければならない学問分野を学生に教育する事は、言うまでもなく歯科大学教員の義務である。学生もそれらを忘れないように懸命の努力をする。一方で、私たちが経験してきたとおり、学生たちは所謂教養科目で教わった多くの知識を試験の後で急激に忘れていく。しかし、それでも何か残るものがある事も私たちは知っている。教養を身につけるのは、種々雑多な知識を詰め込んで雑学王になる為ではなく、人生の可能性を広げ、喜びを広げ、万物に対して思索する自由を得る為である。教育される側も教育する側も無駄を恐れすぎてはいけない。ごんべが種まきや鴉がほじくる。それでもいくつかの種は残り、時を経て実を結ぶだろう。

学生諸君、しなくても良い勉強をする事が損なのではなく、今できる勉強をしない事こそが人生の大きな損失である。最初から試験の心配をしているは、どんな学問もつまらない。役に立つかどうかばかりを心配しているは、サプライズは得られない。まずは知を楽しみなさい。

最初の質問にはこんな風に答えたいと思っている。ただし、彼(彼女)が嫌がらずに最後まで聞いてくれたらだが。
(東京歯科大学物理学研究室 教授)